



0 100 200 300 400 500 600 700 800 900 1000

古代都市ウル

ベルシヤ灣頭の町バスラからユウワラテス河の西岸に沿つてバクダットへ通ずる鐵道線路の途中で一九一八年以降イギリスのホール、さらに二十二年以降はレオナルド、ウーリーを主任とする英米學者達による考古學的調査團が數次にわたつて、古代バビロニア以前の世界最古の都市ウル(Ur)を發掘調査した。このウルを完全なる都市として設計造營したのは第三王朝の始祖ウル・ナムー(2913A—2718C)とその後繼者ドゥンギ(297C—2718C)だといわれる。彼等は月神ナールを崇拜し、多數の神殿王宮を含めた聖域を都市の中心に置き、運河を開いて灌漑用水の便をはかり、市民の居住地をも合せて都市全體を城壁で圍んだ。寫眞上の中央に斜めに見える長方の地區が月神宮殿の聖域テメノスで圍壁の六ヶ所に後のバビロンにみるように門を設け、西北隅に高く聳える方形の大土壘(寫眞下参照)また後代のアツンリアにみるメソポタミア特有の聖塔ジグラット、それを挟んで北側に月神ナールの祠、南に月女神ニンガルの祠があり、塔の東側の前庭はシュメール人占居以前の彩文土器の出た所。聖域中央邊には著名な王墓を含む王朝以前の墓地がある。この聖域の外方には一般住居址及諸寺院の址がありその間を數條の運河がはしり、都市全體を城壁で圍んでゐる。建物は主に日乾煉瓦と瀝青で築かれ、一般家屋では石の入口、木材・泥土の屋根、神殿には排水装置も備え近代都市に劣らぬ様相を呈してゐる。特に延々と繞る外壁は殘存の基部構造をみても高二六呎・基底幅七七呎あり日乾煉瓦を積重ねてあるが、かゝる堅固な大土木工事は強力な主權の下でなければ到底實行出来なかつたことはいふまでもない。

ウル都市文化をつくつたシュメール人の人種的所屬は今日のところ不明である。たゞこのような最古の都市が他にもなおこのメソポタミア平原では例えばラガッシュ、エリデユ、ニブール等で掘り出され、またウル出土の泥章がかのインダス溪谷のモヘンジョダロ出土のものに類似し、これやさらにエジプト古王朝のカフンの町等を考えると古代都市の設立が紀元前何千年に溯る古るものであることが知られる。(藤岡、樋口)

シュメール都市國家時代の家族に就いて

— 血族と稱呼との考察 —

中原 與 茂 九 郎

梗概 本稿に於てはメソポタミア文明の創始者シュメール民族の都市國家時代の一都市國家ラガシュを中心として歴史時代に入つてまもない初期のシュメール人の家族を血統と稱呼組織とに限定して考察したのである。これは本格的家族研究の立場からいへば序論的なものに過ぎないものである。最初に血縁關係を内容的に規定する血統觀念即ち血縁傳承様式——父系制、母系制、父母兩系制——をウル・ニーナ王からグデア王まで、神殿文書や國王碑文等の根本文獻によつて實證的に探究した。都市國家時代に於ては個々の事例では父系が壓倒的ではあるが、そして、記録的には少量の事例が女系によつて即ち婚によつて血統が傳えられたことを示し、且つグデアの時代には女子の家督相續が男子がない場合という條件付で國王によつて規定されたりなどしている。血統は父母兩系によつて傳えられたと考へてよい。次に宗教思想のうち血統觀念が如何に反映されているかを宗教的文獻や國王碑文によつて考察した。シュメール宗教のバンテオンに於ける神々の生活は人間生活の反映である。と説くラドウ博士の説に一部同意しながら神々の相互關係を探究して見た。神々の世界に於ける血統は女性によつて傳えられていることが記録的には壓倒的に多い。ことに神々と都市國家及市民との關係に於ては都市國家及市民の母という表現はあつても父という表現は見られない。男神と國家との關係は政治的表現であり女神と國家との關係は社會的表現である。最後に稱呼組織を家族及親族に關する根本文獻に求め、これの解釋を試みた。舅、姑、姪、婿の四つの稱呼はいずれも女・男の二字を前置している熟語で、これは特殊な關連をもつた稱呼で、これの考へがシュメール親族關係の解明の鍵となるものであるが、未だ結論的解明の域に達していないので本稿にその論議は割愛することとした。

親族の意識は生命的同一性の自覺の象徴としての血の繋
 屬の意識であろう。しかし親族關係は社會的事實であり、
 歴史的に形成されたものであるので、その形態は時代的に

變化する。親族關係の歴史性は血統觀念と稱呼組織とに顯
 示されるであろう。血統觀念は血縁は何人を通して傳われ
 るかの様式であり、これには母系制、父系制、父母兩系制
 の三種類が擧げられるであろう。稱呼組織は親族相互の身
 分的地位を表示するための稱呼の體係であり、一定の秩序
 に従うので、血統觀念が親族關係の内容的規定であるに對
 して、これは外形的規定である。次に血統觀念及稱呼組織
 の面から都市國家時代のシヌメール人の家族に就いて考究
 して見た。

II

歴史時代に入り、一聯の都市國家群が南部メソポタミア
 の沖積平野に建設された頃、是等の都市國家に於ては文献
 の示すところ、シヌメール民族は父家長的家族を形成し、
 家督相續は男系によつて行われていたらしい。しかしこの
 ことは血統が父系のみによつて傳わるものとシヌメール人
 が信じていたからだとは輕々に斷じ難い。

西紀前三千年頃のラガシニ都市國家のウル・ニーナ王朝
 の樹立者たるウル・ニーナ (Ur-Nina, ca 3000 B. C.) は
 「グルサルの子 (なる) グニスの子」 (dumu Gu-ni-da
 dumu Gu-sar) と彼の殘した多くの碑文に記し、彼の子
 アクルガル (Akurgal) が二代の國王となり、三代エーア
 シナツーム (Eannatum) と四代エンアンナツーム (En-
 natum) とは兄弟であり、アクルガルの子である。五代エ
 ンテメナ (Entemena) はエンアンナツームの子であり、
 六代エンアンナツーム二世の父である。ウル・ニーナには
 七人の男子と一人の女子と八人の子があつたことが知られ
 てゐる。⁽¹⁾ 血統表示の形式は Ur-dingir Nina Ingal Iagus,
 dumu Gu-ni-da dumu Gu-sar の如く、「A' B' の子、

「Cの子」と父名を擧げて、その子という形式をとつてゐる。

後にラガシユのバテシとなつたエンリタルヂ (Enlitarzi) がラガシユの主神ニンギルスの僧正 (sanga) であつた時代の文書 (DP. 31) は、Bur-ja-a-ti-sag の妻 Aslag がその不動産一ブルニガを (bur, gan) をニンギルス神の僧正エンリタルヂに賣却した賣買に關する記録であるが、この文書の中にはエンリタルヂの子であつて後年彼を繼いでラガシユのバテシとなつたルーガルアング (Ingalkanda) の名やルーガルアングの未來の妻バルナムタルラ (Banna mbarra) の名が出て來る興味ある文書であるが、バルナムタルラはブルカーキサツグとアシャツグとの女であるが彼女は「Burbakisigの子」(dumu Bur-ja-a-ti-sag-me) と記されて、アシャツグの子とは記されてゐない。(DP. 31, col. III⁹)

上述の例證によつて知られる如く、シヌメールの都市國家時代には父系制がとられてゐることが知られる。

ラガシユ都市國家のウル・ニーナ王朝は六代までは連綿

シヌメール都市國家時代の家族に就いて (中原)

男系相續が行われたことが知られてゐるが六代のエンアンナツーム二世以後のウル・ニーナ家の消息は不明で、一般的にはウル・ニーナ王朝はエンアンナツーム二世を最後として斷絶したものと解されてゐる。しかしエンアンナツーム二世とウル・カギナ王との間に三名のバテシがラガシユに君臨したことは知られてゐる。エンエタルヂ (En-e-tar-zi) エンリタルヂ (En-litar-zi) ルーガルアング (Ingalkanda) である。エンエタルヂとエンリタルヂとの關係は名の類似性以外は兩者の間に血縁的關係の有無を知りうる資料は何もない。エンアンナツーム二世とエンエタルヂとの間にも兩者の血縁的關係を示す積極的資料はないのである。エンリタルヂとルーガルアングとは父子の關係にあることは上述の DP. 19 圓錐形碑文の記事によつて知られるのである。エンリタルヂとその妻 Dinkar⁽⁶⁾ との子がルーガルアングである。ルーガルアングの妻バルナムタルラの父母の名は上述した如く知られてゐる。ルーガルアングの次にラガシユの國王となつたのが社會的經濟的改革を斷行した有名なウルカギナ王 (Urukagina) である。ルーガルア

ングとウルカギナとの血縁關係も亦現存資料にては何等知るよしもないのである。ウルカギナ王治世二年の年號をもつた文書 (TSA. No. 3)⁽⁴⁾ にバルナムタルラの名が見え、彼女はウルカギナ王の妻シャグシャグ (Shagshag) から手當の食料を支給されていることが知られるのである。治世元年の文書 (TSA. No. 2, Rev. col. II¹⁻⁵) に「小麦五グルを大パテシに、小麦九グル一二〇シラとエムマー四グル一九〇シラをバルナムタルラに」とあり、大パテシはルーガルアングと同一視しうるので、ウルカギナの即位後尙ルーガルアングもバルナムタルラも生存し、相當に好遇されていたことが知られるのである。注目すべきことは妻バルナムタルラの手當支給額が夫ルーガルアングよりも多量である點である。「ラガシニの母」と稱せられたバウ女神の神殿から多數の楔形泥章が發掘されているが、それ等の文書の大部分はエンリタルデからウルカギナの時代までのものであり、しかもその文書の大部分はバルナムタルラ及びシャグシャグの二人の王妃の主體的活動を記録しているものであつて、是等の記録からはパテシ、ルーガルアングと國

王ウルカギナとはたゞの Prince-consort にすぎなかつたとの印象をうけるとラングドン教授は兩妃によつて代表される都市國家時代の、王妃の地位の重要性を示唆しておられる。シニメール社會に於ける女性の地位の高かつたことは既に十九世紀末にオックスフォード大學のセイス教授、ベリン大學のデリッチニ教授の目をつけられたところであつて、兩教授ともシニメール社會は母權制社會であつたと主張された。⁽⁵⁾ この點に就いては後に触れることとする。

ウルカギナは王位の正統繼承者ではなくてその篡奪者であると考えられている。それは彼がグデア (Gudea) と共にシニメールリアツカード諸君主中最も多く碑文を残した君主でありながら、その碑文に一回も父の名を擧げない點からの推測である。この點グデアも同様である。上述した如く、ルーガルアングと其妃バルナムタルラがウルカギナ王の初年に生存し、其生活費を支給されていたことは、エンリタルデが其子ルーガルアングの在位の初年に生存していた事實と照應して、王位の保持は終身でなかつたことが推定されるのである。かゝる場合の王位交替は他動

的の廢立によるものか自發的の讓位によるものか、キング教授 (J. W. King) はエンリタルチの場合を廢立と推定している(セ)ヌイヤック (gonomiac) はルーガルアングの時代までウル・ニーナの像に供物が捧げられた事實よりして、恐らく、エンエタルチ及エンリタルチはエンアンナツーム二世の子であり、かくてルーガルアングまではウル・ニーナの血統が続いたものと推定しているが、この説に對してキング教授は創始者(ウル・ニーナ)に對する敬意表示の證據にはなるが王朝繼續の證據にはならないと反對し、エンエタルチ、エンリタルチ及ルーガルアングの三名のパテシとウル・ニーナ王朝との確實なる關係は推測の域を脱しない(ト)と斷定を下している。

ウルカギナ時代より約三世紀後、アッカード王國末期の國力衰弱に乗じて、ラガシニに獨立政權がウル・パウ (Ur-Bau) によつて樹立されている。ウル・パウ (Ur-Bau) の次のパテシはナムマクニ (Nammahni)。(その次はウルガル (Urgal) の順になつてゐることが知られるのである。(ト)ウル・パウの家系は不明であり、彼は「ニンアガ

シニメール都市國家時代の家族に就つて(中原)

ル神の生みし兒(7) *damu tud-da (S) dingir Nin-gal-ka-ge*」とその彫像碑文 (Col. I^{rs}) に記してゐるのみである。ウル・パウに次いでパテシとなつたナムマクニ (Nammahni) はカアザツグ (Ka-azag) の女、ニンカギナ (Ninkagina) の子であることが、ニンカギナのウリギ神 (Urigi) に息子と自分との長壽を祈願して奉獻したメースヘツドの碑銘とパウ神に奉納した女性像の碑銘とによつて知られるのである。(ト)前者の碑銘には「ラガシニのパテシ、ナムマクニの生命の爲に、カアザツグの女ニンカギナ」(四一八行)云々とあり、後者の碑銘には「ラガシニのパテシ、ナムマクニの生命の爲に、彼の生みの母 (anahud-dani) ニンカギナ」(Col. I^{rs}—II^{rs})云々とある。ナムマクニの妻はパテシ、ウル・パウの女ニンガンヅ (Ningandu) であつたことは彼女がニンギルス神やツンシヤツガ神に夫と自分との長壽を祈願して奉納した鉢盤やメースヘツドの同じ内容の碑銘(ラガシニのパテシ、ナムマクニの生命のために、その妻、ラガシニのパテシ、ウル・パウの女ニンガンヅ、彼女の生命のために奉納す)によつ

て知られる。⁽¹³⁾ ナームマクニの次代のパテシ、ウルガルの妻もウル・バウの女であることは彼女の奉納した女性像の碑銘によつて知られるのである。⁽¹⁴⁾ しかし彼女の名と神名とは碑文の破損によつて知ることが出来ない。ウル・バウ、ナームマクニ、ウル・ガルの三代のラガシエのパテシの關係は後二者がウル・バウの女婿であつたことが幸いにも現存の碑文によつて知ることが出来る。この場合ウル・バウのパテシの位及血統は爾後女系を通して繼承されることとなる。ウル・バウにはエンアンニパッダ (En-anni-pad-da) といふ男子があり、ウル(U)の「ナンナル神の高僧」(an dingir Nannar) であつたことが、ウルのエーヌンマーク (En-nun-uh) 神殿跡から發掘された石瓶の破片の碑銘によつて知られる。⁽¹⁵⁾ その碑銘は (1) En-ah-ni-pad-da (2) ur^d Nannar (3) ahn-ni Ur^d Ba-u (4) pa-te-si (5) Lagas^{hi} (6) ……

「エンアンニパッダ、ナンナル神の高僧、ラガシエのパテシ、ウルバウの子、……」とある。エンアンニパッダがウル・バウの男子でありながらラガシエのパテシとならな

つたのは、彼が父より先きに早逝したか、ナンナル神の高僧の地位を去ることが出来なかつたか、その理由は不明であるがラガシエのパテシの位はエンアンニパッダの姉妹の夫即ちウル・バウの女婿によつて繼承されている。有名なグデアがラガシエのパテシとなるのはウル・バウ時代から約半世紀の後である。グデアはその碑文の一つに、家に男の子がなければ、女の子が「燃える油」をもつて吾が像の前に來よと女子の家督相續を規定している。(Sachse B. Col. VII⁴⁴⁻⁴⁵)。

以上シヌメール都市國家時代に於ける血統觀念が社會に如何に具現されてゐたかをラガシエ都市國家のウル・ニーナ時代 (ca. 3000 B. C.) からグデア時代 (ca. 2450 B. C.) まで、不十分ではあるが一通り検討して見た。それによれば都市國家時代のシヌメール社會に於ては父系に偏してはいるが父母兩系制が採られていたことが知られた。次に章を改めて、シヌメール人の血統觀そのものを考察して見たい。

① ウル・ニーナの家族像碑文 A (Familien-Bastrelief) Thunauer-Dangin, Die Sumerischen und Akkadischen Königs-inschr

iften (編號SAK), Leipzig 1907, s. 8 に神文收録せらる。

- ② Dp ㊦ Alloth de la Fuige, Documents Presargoniques, Paris 1908-1920. の略號「貨物寫眞及手寫された楔形泥字の寫眞」の「Dp. 31 は第三十一號文書。

- ③ Thureau-Dangin, Recueil de Tablettes Chaldeenes (編號 RTG), Paris 1903. ナーローモンシヤン氏の手寫を寫眞版とシテ之の「譯字」譯語を「No. 16, Obv. Col. 15^a-17^a」に「エムギルメ神の信正の妻 (dann) キヤナ」Rev. Col. III^a」に「エムリタルキ」エムギルメ神の信正とある。

- ④ H. de Genouillac, Tablettes Sumeriennes Archaïques, Paris 1909. の略號「楔形泥字の手寫版」譯字「譯語付」No. 9, Obv. Col. 1^a, Rev. Col. 1^a.

- ⑤ Cambridge Ancient History, vol. I, p. 386.

- ⑥ A. H. Sayce, Babylonians and Assyrians, London 1900. pp. 13 ff. F. Delitsch, Babel und Bible. (Engl. transl.), New York 1903, p. 202.

- ⑦ RTG. Nos. 46, 58, 60 の諸文書にエムリタルキの活動した記事がある。Nos. 46, 58 は「エシ、ルーガル」の年號が記されて居る。六十號文書は治世三年とあるのみで統治者の名はなし。

- ⑧ L. W. King, History of Sumer and Akkad, London 1923, p. 173.

- ⑨ *ibid.*, p. 169, foot-note (1)

- ⑩ *ibid.*, p. 176

⑪ ナームマクニとウルガルとの前後は疑問があるところ、ナームマクニはウルガルを先きじ (SAK. S. 63) キング

はナームマクニを先きじして居る (King, op. cit. の附録の年代表)。RTG. No. 187 文書にナームマクニの「エシ時代」にウルガル、エムリタルキ (maskin) とあるウルガルをナームマクニの義兄弟と推定して、キング教授説に従う。

- ⑫ SAK. s. 64.

- ⑬ *ibid.*, s. 64.

- ⑭ *ibid.*, s. 63.

- ⑮ C. J. Gadd and L. Legrain, Ur Excavations: Royal Inscriptions, London 1928, No. 25.

三

まづシメメール人の血統觀念をシメメール宗教思想のうちに探究して見たい。一般的にいって、宗教は人間文化中最も保守的傳統的性格を有っており、祭祀、儀禮、讚歌、祝詞等にはそれが創られた當時の社會の制度や習慣が反映され、それらの制度や習慣が現實の社會生活からは捨て去られた後も後世永く保存傳承されるものである。

シメメール民族の宗教及神學思想を研究したラドウ博士

シメメール都市國家時代の家族に就いて (中原)

(H. Radan) は神々の社會 (divine society) ・は人間社會 (human society) の反映であり、人間社會が原型にして神々の社會はその畫像である。シヌメール人は神を彼等自身に創造した。神々は啓示者であるが、それは人間が嘗て神々に付與したものを説明するに外ならない。神の歴史は人間の歴史である。シヌメール民族の宗教や神學を研究することによつてシヌメール民族の歴史及文化に關する一つの知識を得ることが出来るとシヌメール人の宗教と文化との密接なる相互關係を指摘しておられる⁽¹⁾。ラドウ教授は、人間が性交によつて子を産む如く、神々も性交して、(kian-dun-ung-ung) 子を産む (tud-tu) 。シヌメール民族はその社會生活及制度の初期段階に於ては血統は母系によつて傳えられたしく、この慣習は神々の社會に移されたと解釋し、その例證としてラドウ博士は親² 父母なる語を取り擧げ、シヌメール人は父母を a-t-ama と呼んだが古き文獻にはこれが逆に母父 ama-a-a と母を先きに置いてゐる。また神々の出自の仕方を見れば、女神ニンマル (キ) は女神ニーナの女とあり、ニンウルタ神は Egi (= ken)-ta

kar (sar) (= Egi-tar-mal) の子即ち女神ニンリル (Ninli) の子であり、「女神バウの七人の兒」など母系によつて神の出自が示されている。血統が父系によつて傳えられるようになつてからは ama-a-a は a-t-ama に變り、ニンマル (キ) はエンリゾ神の女、ニンウルタはエンリルの子、など神々の社會に於ても出自は父系に變つてゐる。

ラドウ博士は更に進んで、神々の間に見られる種々の婚姻關係から初期のシヌメール人は一夫多妻 (polygamy) 一妻多夫 (polyandry) を慣行したに違いない。また兄弟姉妹母子、父女の間に性交が行われたに相違なしと大膽な斷定を下しておられる⁽²⁾。神々の社會が人間社會の完全な畫像との見地に立つラドウ博士としてはかゝる結論に到達されたのは當然であろう。しかし神々の間に於ける父子、兄弟姉妹關係の成立には m. Jastrow, A. Ungnad 等によつて指摘されている如く⁽³⁾、政治的要素も考慮されなければならぬ。政治的霸權の趨移によつて神々のパンテオンに於ける親子、兄弟姉妹關係が新しく發生したり、従前の關係が變更されたりするものであることは Jastrow, Ungnad の説

く通りである。或る女神があれこれの神の、時には「母」、時には妻、時には姉妹として現われ、また同様に或る神が一つの、あるいは同じ女神の「父」であつたり、「夫」であつたり、兄弟であつたりする神々の親族關係がシュメール初期社會の一夫多妻、一妻多夫、更に兄弟姉妹母子、父女の間の性行爲の理由とするラドウ博士の説には、俄かには同意し難いが、パンテオンに於ける神々の親族關係を他の要素と共にシュメール民族の血統觀念考察の重要な資料とすることには賛成である。

西紀前三千年頃ラガシニ都市國家に於て信仰せられた神々はウル・ニーナ王の碑文に記録されているが、それ等の神々の相互關係に就いては記録されていない。ラガシニ都市國家の一地域ギルス (Girsu) の (部族神としての) ニンギルス (Ningirsu)、ニーナ (Nina) 地域の (部族神) ニーナ、ウルアザツガ (Uru-azaga) 地域の (部族神) バウ (Bau) ニガツムツグ (Gatumdu) 等の名が出てくる。ニンギルスは男神であり、後にラガシニ都市國家の主神となつてゐる。ニーナとバウは女神で、バウはニンギルスの

シニメール都市國家時代の家族に就いて (中原)

配偶神となるべき女神である。ガツムツグはバウの別名である。

エーアンナツムの碑文に至つて始めて神々の相互關係が記録されるに至つた。「インニニ (Innini) の愛する配偶者 (ニ夫) ルーガルウル (Lugal-uru)」とある。こゝに注意すべきはルーガルウルは (女神) インニニの愛する夫という妻を中心とした表現である。インニニはラガシニの一地域ウル (UruニGishgala) の神、ルーガルウルは配偶神である。ルーガルウル神の名はウル・ニーナの碑文に現われている。

エンテメナの碑文には、ガツムツグは「ラガシニの母 (ama Lagaski)」(Türangelstein G. 1. 3)「エンリルは「神々の父 (ab-ba dingir-dingir-ri-ne)」(Kegel, Col. I²) とある。

ウル・バウの彫像碑文にはニンハルサツグ (Ninḫarsag) は「神々の母 (ama dingir-ri-ne)」善き婦人ニンマル (キ) ニーナの長女に (dingir Nin-mar-ki sul-šag-ga dinnu-sag dingir Nina-ra)」とあり、又彼の釘状泥棒碑文には「善

き婦人バウ、アヌの女」とある。

グデアの碑文には、「ニンツード、神々の母 (dingir Nin-tud ama dingir-ri-ne)」(Statue A. Col. III⁵⁶)、「ニントルサグ、都市を輝かす女王、(都市の)子等(=市民)の母 (d. Nin-har-sag nin uru-da ma-a ama dumnu-ne)」(Statue A. Col. I³) とある。ニンツードはニントルサグの別名である。グデアがバウ神殿に奉納したグデア自身の彫像の名は、「女主、聖なるアヌの愛兒、母バウはエーシルシル (E-sil-sir-sir) 神殿にてグデアに生命を與え給えり」(Statue H. Col. III¹⁵) と稱えられた。

(二三)「彼の母ニーナはパテシ(=グデア)に答えて曰く」「……(一七)吾兄弟(=es)ニンギルス」(Cylinder A Col. III¹⁷) によつてニーナとニンギルスは兄妹の關係にあることが知られる。ニーナの稱號には「シララシニム(神殿)の姉妹神 (SAL+KU dingir Shirra-sim-ka)」(Cyl. A Col. II¹⁸, III¹⁷) とある。

シララシニムはラガシニにあるニーナの神殿名である。「歡喜の婚禮の贈物 (ig-munsa sag-jul-la) をニンギル

スはアヌの女バウ、彼の愛する妻 (dumnu-agi-ni) に與えた (Statue G Col. II¹⁷)。ラガシニ都市國家に於てはグデア以前古くより、新年元旦をニンギルスとバウとの結婚の日として盛大な祝祭が行われ、國王はニンギルスのバウへの婚禮の贈物としてバウ神殿へ多量の奉納物を贈る慣習があり、グデアの碑文には彼は從來の諸君主よりも約二倍の奉納物を贈ることを數量的に明記している (Statue B Cols. VI—VII¹⁶)。新年第一日は「バウの祭の月 (ita ezen dingir Ba-n)」と稱せられてゐる。

圓筒碑文Bのコラム一〇行には七名の女神が擧げられ、彼女等は「バウの七つ兒、主ニンギルスの小さな者 (11. dumnu-mas min dingir Ba-n-ne 12. ban-da en dingir Nin-gir-su-ka-ne)」とある。kumnu-mas は双生兒の意である。七名の女神はバウとニンギルスとの間に生れた「七つ兒」である。以上に列擧したウル・ニーナよりグデアに至るラガシニ都市國家時代に信じられた神々の相互關係から血統觀念を抽出すれば次の如くなるであろう。「神々の父」「神々の母」といふ表現によつて神々の血

統は、父母兩系から傳わると考えられていたことが知られる。神々と都市國家との關係に於ては「ラガシュの父」といふ父系的表現が見られず、「ラゲシュの母」、「市民の母」という母系的表現が用いられている。男神と都市國家との關係は「ニンギルスはラガシュの王」とか「世界の王エンリル」の如く政治的表現であるに對して、女神と都市國家或は市民との關係は社會的表現である。「七つ兒」の兩親の序列に於て母神が父神の前に置かれていることも注目すべき點である。これに關聯して神々と君主との關係を一瞥しよう。エーア、エンナツームもエンテメナも「ニンハルサツグの聖なる乳房を喰わされ(=乳を飲まされ)」と記している。(Ennatum of Geierstele, Rev. Col. V. 47; Entemena of Brackstein A Col. I¹⁰—II¹)。ウル・バウは「ニンアガルに生れし子 (dumu-bud-da dingir Nin-a-gul-ka-ge) (Statue, Col. I⁷⁸), 名稱「シチブは Gatumding (Cyl. A III⁶), Nina (Cyl. A VII), Ninsun (Cyl. B Col. XXIII⁹) の三女神を彼の母と記している。メデアはガツームツグの祈願のうちに、「母を我もたず、吾母は汝なり。父を我

シニメール都市國家時代の家族に就いて(中原)

もたず、吾父は汝なり。」(Cyl. A III⁶⁷)と呼び、女神ガツームツクを一身に男女兩性の原理を兼有する母即兩親—母親—と考へている。この觀念はシニメール宗教の一つの特徴をなす神祕思想である。ラドウ博士は後にウルク都市國家の主神となつてゐるシニメール民族最古の神アン(Au=Anu)の性格たる an-a-a 「母父—親」に就いて詳細に研究してゐる。⁽²⁾今こゝで問題となるのは、諸君主がその出自を「女神」に求めていることであり、君主及都市國家は母系の出自をもつてゐるといふ宗教思想である。前章に於て述べた如く、都市國家時代のシニメール社會の現實の血統關係は父系に重點の置かれてゐる父母兩系によつて傳へられていたのである。しかるに都市國家時代の宗教思想のうちに示されたる血統觀念には母系制的なものが伺えるであろう。而してこのことはシニメール民族が都市國家を形成する以前に血統の母系制の段階を経過したたであるとの推斷の一の根據となるものとあらう。

註

① H. Radan, Sumerian Hymns and Prayers to god Nin-ib

from the Temple Library of Ni ppur. Philadelphia 1911, p. 3.

② *ibid.*, p. 2 ff.

③ M. Jastrow, *The Civilization of Babylonia and Assyria*, Philadelphia 1915, p. 193.

A. Ungnad, *Die Religion der Babylonier und Assyrier*, Jena 1921, s. 14.

④ Geleiste, *Rev. Col. VI 7-9.*

⑤ *Statue, Col. V s-10.*

⑥ Ton-Nagel A. I. 1-3.

⑦ Entemena の Backstein A Col. I¹⁻³ に於て dingir Nina Sira-ra-šun-ta 「ニナノ神殿のニナ」である。SAL+KUR は姉妹の意味であるが、その読み方は不明で、nin, sal-egi と讀まれてはらるが疑問的である。意味はミナノ神殿に住むニンギシキの姉妹神である。Thur-Dang は 'Schwester von Sira-ra-šun-ta' と譯し、Sira-ra-šun-ta を神名に解してあるが、私は SAL+KUR dingir を姉妹なる神と同格に見て dingir Nina Sira-ra-šun-ta = nin (?) dingir Sira-ra-šun-ta と解した。尚、Thur-Dang はは前卷の 'Nin in Sira-ra-šun' と譯してある。See, SAK. s. 35, 93.

⑧ Radan, *op. cit.*, p. 4 ff.

四

前二章に於て都市國家時代に現實に行われた血統繫屬の形態と、宗教思想に見らるゝ血統繫屬關係とを考察してきたが、本章に於ては親族關係の外形的規定となる稱呼組織に就いて検討して見た。

シメメル語の血族、親族を示す語は usbar, urn の二語があり、家族の語は ni-ni-na がある。usbar はアッカド語には 'šippe' 「血族」「結合」「共同」の意味をもつてゐる。(1) emīru の語に譯されつゝある。語源は恐らく us dannu 「血」の bar は parānu 「分ける」「配分する」の usbar は「血を分けあつたもの」即ち「血族」「ギョウ」。「血族共同體」であり、血縁關係を示す語であらう。ni-na はアッカド語には emīru と譯されつゝある。(2) emīru は血族、親族、一族等近親關係 (Verwandtschaft) を現わす語である。(3) シメメル語の urn の語源は「魚卵」(urn ša nmi) であらう。(4) これは魚食民族であつたシメメル人が血縁的近親關係を、小粒の結合より成る魚卵に比したものである。部族聯合より發展したと思考せられるシメメル都市國家の「都市」(urn) の語源も、有名な都市ウル (U₁) の

義字は古くは *ses* (兄弟) — *AB* (父) — *KI* (地) と書かれて *uri* と讀まれてゐることや、既に述べたラガシニ都市國家の四地區の二つが *uru, uru-wag-ga* といわれ、ラガシニ都市國家は四地區の合併によつて形成されたと推定される——*Amind* の所論以來定説となつてゐる——⁽⁵⁾ 點などからして血族、親族の *uru* と同語源「魚卵」から出たものであらう。

ni-ra はアッカード語には *kinbu* 「家族」と翻譯されてゐる。⁽⁶⁾ *ni* は *zumu* 「身體」及 *ramian* 「自身」の意、*ra* は *rib, rig* の語尾の脱落されたもので *rihu* 「生む」「産まれる」の意、*nia* は「一身から生れたもの」の意で、これは生命繫屬を一人の祖親から派生したとなす祖宗單一觀の思想であり、これは前述した如く、シニメール人の古き宗教思想——神は男女兩性の原理を一身に具傳するとなす——*androgynous nature* の信仰、即ち *ama-ra* 「母父」「親」の思想と相通するものである。而して家族は單一祖宗より出自したものとなす家族觀はシニメール人の祖先崇拝の習慣と一致する。*ama-ra* の熟語に於て母を父に前置

シニメール都市國家時代の家族に就て (中原)

きしてゐるのは「子は母の體內から生れる」という生理現象の外に母の地位が父よりも重んぜられた時代に作られた造語に他ならないと考えられる。*ama-ra* をアッカード語には *abu n ummu* 「父と母」と譯されてゐるばかりでなくシニメール語に於ても後には *a-ama* と書くようになってゐる。⁽⁷⁾ 女 (*sa*) を男 (*us* or *nika*) に前置してゐる熟語は、親族關係を示す稱呼組織のうちにも見られる。男は *SAL-UŠ-DAM* と書かれ、姑は *SAL-UŠ-MAŠ*、婿は *SAL-UŠ-SAR*、妻は *SAL-UŠ*、夫婦は *SAL-UŠ-DAM* の如く女が男に前置されてゐる。また古きエンリル神への祈禱文などにも「吾町にて乙女の悲歎は益々加わる。吾町にて若者の悲歎は愈々増す。女郎屋にゐる吾娘はその家族から取り去られ、若者はその一族の家から山へ出て行く」⁽⁸⁾ の如く女性に關する事項が男性のそれに前置されてゐる。

次に家族及親族の稱呼組織を考究する。まず縦の系列として家族の構成系統を世代から見て行く。父は *ama, mu ad* の稱呼がある。母は *ama* の一語であるが *amo-tud-da* 「生母」の稱呼がある。子は男女共類別的に *dumu* と呼ば

れるが *dumu-sal* 「女子」 *dumu-nika* 「男子」の個別的稱呼があり、都市國家時代には兩方が使用されている。「男子」の二字は *niha* と讀まれ「相續者」の語となつてゐるのは家督及財産相續が「男子」によつて行われるようになつてつくられた稱呼であらう。更に後には *niha* は「女子相續者」にも使用されてゐる。⁽¹⁶⁾

兄弟姉妹は類別的に「血」(*dannu*)を意味する *gas* or *gas* と稱呼されたらしいが後に兄弟のみの稱呼となる。姉妹の稱呼には *SAL+KU* の文字があるが讀み方は不明で疑問的に *nin* or *sal-egi* or (*sal*) *egi* と讀まれてゐる。祖父と祖先とは同一語で *PA-GIS-BIL-GA*, or *PA-BIL-GA* と書かれてゐるが如何に稱呼されたかは不明である。孫には特別の稱呼はなく、孫以下は *dumu-ka* 「後裔」と類別的に總稱されたらしい。エーアンナツームが祖父ウル・ニーナを (*Feldstein A Col. VIII¹⁻⁴*)、エンテメナが伯父エーアンナツームを (*Kegel I³⁰⁻³⁵*) 共に *PA-GIS-BIL-GA* と呼んでゐるのは此稱呼が祖父を含めて祖先一般の類別的稱呼であつたと見るべきであらう。また曾孫にあたるエン

テメナが自らをウル・ニーナの *dumu-ka* ⁽¹³⁾ と稱してゐるのは此語が孫以下の後裔の類別的稱呼と考うべきであらう。以上の稱呼から推定されることは都市國家時代のシニメールの家族は親(父母)↑↓自己(夫婦)↑↓子(男女)の我を中軸とする親子二世代を基本とする構造をもつていたこととなる。即ち家長が父親である場合は親子繫屬關係は父と自己であり、父が死亡し自己が家長となるとき親子繫屬關係は、自己と自己の子に移る。碑文その他の文献に見らるる「AはBの子」、「BはCの子」といふ遡源的表現の仕方は家族の縦の基本構造が親子繫屬關係にあることを物語るものである。ウル・ニーナの家族像碑文を參考すれば此間の消息がよくうかゞえる。家族像にはウル・ニーナと彼の八名の子(内一人は女)の像とが薄肉彫され、それに各自の名が説明的に記銘されてゐる。ウル・ニーナの像の説明は、ウル・ニーナ、グニスの子、グルサルの子とあり、八名の像には彼等の名が夫々記され、「兒」と説明されてゐる。例えば「リツダ、(女)兒」「アクルガル、兒」の如くである。ウル・ニーナの父及祖父の像は彫られていな

い。「某の子」と書かれている時は某は既に死亡しているのである。これは父家長的家族に於ては父権は父の死後其子によつて繼承されるからである。父の稱呼の一つの *min* には *min* 「白髪の人」「老人」の意があり、父が長生すれば孫或は曾孫が家族員の中に加わることはありうるのである。これと逆に母は孫が家長になる頃まで家族員として生存することもありうる。しかし父権を中心としたシメール家族に於ては、親子繫属關係が家族の基本的構造であつた。

次に家族の横の關係に移つて行きたい。横への擴りは婚姻による男女の結合即ち夫婦が基本となる。シメール語で夫婦の稱呼は *nitalam* = *qairu* (SAL-US-DAM) であり、これは SAL「女」、US「男」、DAM「一緒に在る」の三字より成る熟語である。夫の稱呼は *dam* (= *mutu*) である。 *dam* は、夫婦の第三字目と同じ文字であり、SAL + *GIS* 即ち「女陰」と「男根」とによつて象徴される「女」と「男」との二文字を結合した合意文字である。 *dam* は普通語としては *da-am* 「側にある」「側に居るもの」の意

である。妻の稱呼も *dam* (= *asfa*) である。妻の稱呼には *dam* の他に *nitalam* (= *naqirū*) があり、⁽¹⁷⁾ 同衾者の意。SAL-US「女」と「男」の二字より成る熟語である。

男女の結合即ち婚姻を通して種々な形態の親族關係が發生してくる。シメール都市國家時代の親族稱呼には次の如きものがある。

FSA. FRC. DP. SAK. 等の根本文獻から拾ひ出して見ると、*ab-da sal* 「(ン)テシの) 妻の父」、*ama-sal* 「(ン)テシの) 妻の母」、*ses-sal* 「(ン)テシの) 妻の兄弟」、*mi-sal* 「(ン)テシの) 妻の姉妹」、*mi-ama* 「母の姉妹」等の親族關係を示す語彙が見出されるがこれらの表現は親族の血縁關係を説明する直接的表現法である。しかし以下の「舅」*murru* or *murru* = *enu rabū* (SAL-US-DAM) (「大きい義父の意)」「姑」SAL-US-MAŠ の熟語の読み方は不明であるがアッカド語には *emītu* 「義母」と譯されている。「姪」*mušsa* or *mušsa* = *enu sišru* (SAL-US-SA) (「小さい義父の意)」「姪」*arib* or *erib* = *nāti enu* (義父の女の義)、『LAL-A-BAR-RI』⁽¹⁸⁾ *māti enu* の四種類の稱呼は特徴

的である。a-rib, は a-ri(š)-a=rihu, rihtu 「生む」「生むこと」と關係ある語で、e-rib, は q-rib の變化せるもの。LAL-A-BAR-RI の讀みと意味は不明であるが、アッカード語には「義父の女」の意味に譯されてゐる。以上四種の稱呼のうち姪を除いて他は SAI-UR 「女」「男」の文字が共通に前置されている。従つて是等の稱呼は特殊の意圖をもつて作られた語彙と考えられる。また「義父の女」即ち姪の稱呼があつて甥の稱呼がないのも特徴的である。

恐らく是等の舅、姑、姪、婚の稱呼は後にラガシ都市國家を形成する四地區に居住した四部族間に行われた族外婚姻制の下に發生した稱呼組織と考えられる。舅、姑の稱呼は族外婚制による母と父の姉妹とを區別し、父と母の兄弟とを區別するために發生した稱呼であらうし、また姪、婚の稱呼の起源は母系制による婚姻組織のうちに求められるであらうと予想されはするけれども未だこの點の考究に不充分のところがあるため是等に就いての卑見の開陳は他に譲りたす。

註

- ① A. Deimel, Sumerisches Lexikon (総號 SL) No. 185, 3). G. Bezold, Assyrisches Glossar, s. 39.
- ② SL, No. 185, 4); No. 324, 1)
- ③ Bezold, op. cit. s. 39.
- ④ SL, No. 185, 5).
- ⑤ M. Jastrow, The Religion of Babylonia and Assyria, Boston 1898, p. 57, foot-note 1.
- ⑥ Delitsch, Sumerisches Glossar, s. 199.
- ⑦ Radau, op. cit., p. 2, foot-note 2; P. 5, foot-note, 4.
- ⑧ SL, No. 554.
- ⑨ S. Langdon, Sumerian and Babylonian Psalms, Paris 1909, p. 32-3.
- ⑩ Gndea Statute (B. C.) Col. VII¹⁴⁻¹⁵.
- ⑪ SL, No. 557, 1)
- ⑫ Radau, op. cit. p. 2.
- ⑬ Entemennu, Alabaster-Tablet, Obv. Col. II²⁻³.
- ⑭ Delitsch, op. cit., s. 4. 父の尊稱 *sa-gar*。尙他の稱呼 ad (= maliku) は決定者判決者としての父の尊號 *sa-gar* は人間としての父。
- ⑮ SL, No. 554, 41)
- ⑯ SL, No. 482, 77)